

パネルディスカッション

身体と心と沖縄

司会・呉智英 沖繩の歴史、文化の中で医療がどういう意味を持つか、議論してきたい。まず、お二人から問題提起を。

新しい時代の医学は、既に救急医療によって克服された「生き死に」の医学ではなく、QOL（クオリティ・オブ・ライフ）生活

院し、初めて病院で寝すに死にざまを見ている医療者

は自分自身のメンタルケアをどうしているか、アレックスをどう癒しているのか、シャーをどう癒しているのか、

かということ。もう一つは、人生の最期を過す空間という目で見て、天井やエレベーターといった病院の環境は、機能的ではあるが、随分寂しい。生活の質の部分が病院の中でどう扱われているのかが気になった。

の死の文化が今日どうなっているのか。病院や医療が活発に議論される一方で、お墓の扱われ方などは食相になりつつあるのではないか。

司会 お二人の話を素材にして討論を始めたい。

けすくのか」と考えた。東京の人が沖繩にあこがれるのは「癒し」や「魂」という思想の背景。沖繩が持つ財産としての、文化だ。日本全体で共有できるものとして考えてはどうか。

ういう人が病院に入れる雰囲気をつくれば、人は安らかに死ねるだろう。それを西洋医学は拒否してきた。橋爪大三郎 病院と高齢者、みとる家族、本人が生まれ育った地域がもっと密接にならないといけない。それと、病院が公的

高良 医療従事者にゆとりがなければ、患者との人間的な関係が成立しにくいのではないか。これは、個々の医師や医療機関の責任ではなく、われわれ社会の問題として考えないといけない。それと、病院が公的

仲原靖夫 私は外科を實踐しながら、独学で東洋医学を習得してきた。西洋医学は、特定の原因によって特定の病変が起るから、え、原因物質を排除する治療を行ってきた。しかし、全面的に成功しているわけではなく、壁にぶつかっている。これに対して、東洋医学は人間の体はバランスによって成り立っていると考え、外的要因と内的要因が影響した複雑系と考えらる。

こうした時代に、氣候が温暖で精神的にもおろかな沖繩は、心も体もリラックスできる癒（い）やししの条件を備えているといえる。ストレスが蓄積した現代文明の中で、沖繩は癒しのモデルとして位置づけられる。

高良倉吉 小さな経験から話したい。最近、父が入

ボジウム「長寿社会とハートライフ」=11月29

内のQOL 高良氏
足が課題に 松村氏

武見敏三 沖繩に限らず
 全国でも共有できる問題だ
 ろう。特に死について。例
 えは死亡診断書が正確に書
 かれ、医学が発展するための
 情報として整理されてい
 るか。死後の尊厳について
 の指摘もあったが、それだ
 けでなく臓器移植に対する
 日本人の考え方にもかかわ
 るだろう。

与那原恵 最近の経験だ
 が、知り合いで八十歳にな
 る沖縄出身のおばーの夢を
 かなえてあげよう、とマレ

堂園晴彦 病院の中に死
 という文化が入り込むべき
 だ。霊的、精神的な問題は
 今、病院では排除されてい
 る。沖縄では、霊媒師の習
 慣が残っているという。そ

氏 園氏
 吳 堂
 用言

が、逆に面でも家族を持たず、地域社会から切り離された孤独な人が今後増えていく。高齢社会の中では、そういう死の形も増えるだろう。すべての人が家族に見守られ、地域社会の懷で死ぬというわけではない。それを受け止める役割を病院が持つべきなのかもしれない。

仲原 医療人への「癒し」について。確かに人の生き死にかかわる医師には、かなりのストレスがかかる。松村理司 臨死という

な空間なら、機能、テザン、雰囲気などを利用者のニーズを含めて検討されてもいい。

また将来、沖縄がアジアや開発途上国に向けた医療サービスの拠点となる場合の可能性を考え、検討するの意見があまり反映されていないのではないか。医療関係者はもっと多様な分野に参加して、社会的な発言力を強く持つべきだ。

ハートライフ病院 10周年記念シンポ

ハートライフ病院（天願勇二の開設十周年を記念したシンポジウム「長寿社会とハートライフ」が十一月二十九日、宣野湾市の沖繩コナヘンションセンターで開かれた。同病院主催、琉球新報社共催。二十世紀の医療のあり方と「転換期の医療政策のあり方」という二つのセッションと、「身体と心と沖繩」をテーマにしたパネルディスカッションが行われ、各分野の専門家八人が今後の新しい医療の在り方や沖繩が医療分野で果たす役割などについて討議した。（文中敬称略）



今後の医療の在り方について、8人のパネリストが議論したシンポジウム「長寿社会とハートライフ」＝11月29日、沖縄コンベンションセンター

気になる院内のQOL 高良氏
ハード面不足が課題に 松村氏



高良倉吉氏

旅行した。オルネオまで行きたがるくらい元気だったが、同時に死の準備もしていた。物を少しずつ捨てたりして。それで気付いたが、（彼女が）生から死へまっすぐにいくのではなく、生と死が「まだらの状態」にあったのだと思う。その「まだらの状態」の時、病院はおぼーの思いをどれた

の指摘もあったが、それだけでなく臓器移植に對する日本人の考え方にもかかわるだろう。

与那原恵 最近の経験だが、知り合いで八十歳になる沖縄出身のおばの夢をかなえてあげよう、とマレーシアのボルネオと一緒に

武見敬三 沖繩に限らず
全国でも共有できる問題だ
ろう。特に死について。例
えば死亡診断書が正確に書
かれ、医学が発展するため
の情報として整理されてい
るか。死後の尊厳について

サービスは無い
れる医師の発

無用 吳氏
堂園氏

堂園晴彦 病院の中に死
という文化が入り込むべき
だ。霊的、精神的な問題は
今、病院では排除されてい
る。沖縄では、霊媒師の習
慣が残っているという。そ

過剰なサービスは無用 呉氏
求められる医師の発言 堂園氏



吳 智英氏

司會 先日、齒匠で治療したが、そこで町内の有線放送が流れていた。不快感の緩和もあるが、過剰なサービスがあるくらいなら、むしろ極めて無機質な病室であった方がいいという面もあるのでは。

それではない。将

理室」といふシステムで負担を軽くすることもあつたが、もちろん、一生懸命になつて患者を助け、満足させることが医者への癒しにもなるだろう。それと病院の環境についてだが、患者が何を求めているのか、実際に自ら病室で横になつて考えないといけないのではないか。

ハード面の見方は、極めて政治的、経済的な課題だろう。ただ、米国人は「自然」は要らなないといふ。キリスト教が背景にあり、家族が周りにい

死めといふわけにはない。その可能性を考えると、極許す。それを受け止める役割を病院が持つべきなのかもしれない。

仲原 医療人への「癒し」について。確かに人の生き死にかかわる医師には、かなりのストレスがかかる。ICU(集中治療室)か、松村理司 臨死という

が、逆な面では、家族を持たない空間から機能、デザイン、雰囲気などを利用者のニーズを含めて検討されていく。高齢社会の中では、そういう死の形も増えるだろう。すべての人が家族にや開発途上国に向けた医療サビースの拠点となる場合

ういう人が病院に入れる雰囲気をつくれば、人は安らかに死ねるだろう。それを西洋医学は拒否してきた。橋爪大三郎 病院と高齢者、みとる家族、本人が生まれ育った地域がもっと密接にならないといけない。それと、病院が公的

高良 医療従事者にゆとりがなければ、患者との人間的な関係が成立しにくいのではないか。これは、個々の医師や医療機関の責任ではなく、われわれ社会の問題として考えないといけない。それと、病院が公的

来 考えていくべきだ

「上へなっている患者のそばにいたかった」という動機で医師を目指し、現在もその方向に在る同窓の医師がいる。例外的な意見だが、看護婦を志す中でそういう感性を持つ人は多い。

アジア見つめた医療を

長寿社会とハートライフ

国、中国、シンガポール、タイは日本に遅れて急速な高齢社会が訪れる。だから、日本で蓄積する高齢社会へのハード、ソフトは、育てる段階からアジア的視野で当たるべきだ。

堂園 亡くなる時、自己表現ができる方法を持っていることが大切。絵をかくたり俳句を詠む患者は豊かに亡くなる傾向にある。それと医者がもっと発言すべきだ、という意見は私も思う。医者はデロリストになるべきだ。医療と福祉を担う医者が発言することで社会は変わる。

武見 沖縄は、日本とアジアを結びつける地理的、社会的な条件を持っている。二十一世紀に向け、保健、医療で国際貢献するのは日本に合っている分野だ。それを実践する場として沖縄は大きな期待が持てる。高齢化は二〇二五年で、仲原 繰り返しになる頭打ちになる。介護保険などいろいろな蓄積がされるが、国内だけを視野に入れ、対し、東洋医学では健康なてはいけない。台湾、韓

が、西洋医学は発病した段階で初めて診断されるのに、対し、東洋医学では健康な状態が崩れ、発病するまで

出席者

松村理司(京都・市立舞鶴市民病院副院長)
堂園晴彦(鹿児島・堂園メディカルハウス 院長)
武見敬三(参議院議員)
橋爪大三郎(東京工業大学教授・社会学)
高良倉吉(琉球大学教授・琉球史)
与那原恵(ノンフィクションライター)
仲原靖夫(ハートライフ病院院長)
司会 呉智英(評論家)



フロアからの質疑も相次いだパネルディスカッション

「本土」と問題を共有を 与那原氏 医師法の調整が必要 武見氏



与那原恵氏

司会 高良さん、今の話を踏まえて何かお考えは、高良 沖縄がこうありたいと将来のことを言い続

けている時、われわれが失

ては、沖縄が情報発信源になる

ある程度広がりやすい枠を

初めから考えないといけな

武見 医師法の調整もあ

いう視点で語られることが

多かつたが、ある意味では

粗雑な面を生んだ。沖縄が

有効な医療の確立を 仲原氏 沖縄が情報発信源に 橋爪氏



仲原靖夫氏

司会 高良さん、今の話を踏まえて何かお考えは、高良 沖縄がこうありたいと将来のことを言い続

けている時、われわれが失

ては、沖縄が情報発信源になる

ある程度広がりやすい枠を

初めから考えないといけな

武見 医師法の調整もあ

いう視点で語られることが

多かつたが、ある意味では

粗雑な面を生んだ。沖縄が

ては、沖縄が情報発信源になる

ある程度広がりやすい枠を

初めから考えないといけな

武見 医師法の調整もあ

いう視点で語られることが

多かつたが、ある意味では

粗雑な面を生んだ。沖縄が

ては、沖縄が情報発信源になる

